



(長島) しかも、この構想は、戦後初めて、日本がこの地域のリーダーとして、今後どうしていくべきかという大戦略を世界に示した。それをアメリカが追認したという歴史的な意義がありました。

(河野) Free and Open Indo-Pacific」と日本が言ったから、アメリカが同じ言葉を使ってくれた。そこから、オーストラリアとか、いろいろな国がそれに乗り、最後はASEANが「インド洋と太平洋を繋いでいるのはASEANだ」と言って独自のインド太平洋構想を出してきた。同時に、アメリカが離脱した TPP を日本がしっかりまとめた。そこがインド太平洋戦略の根底で繋がってききました。



昨年逝去された台湾の李登輝元総統から直接ご指導いただく。



米連邦議会議事堂前で、米留学時代に培った政官学の人脈は貴重な財産。



香港、ウイグル、ミャンマーなどに対する人権弾圧と闘う「人権外交」を超党派で考える議員連盟の事務局長に就任。

(長島) 外務大臣として「自由で開かれたインド太平洋」構想を主導されたわけですが、その構想に込めた思いはどのようなものでしたか。
(河野) やはり、新しい時代のルールメイキングをしつかりやっていくというのが一番根底にありました。

特別対談 長島昭久×河野太郎



経世済政政策研究会の同志議員と共に菅義偉総理に緊急経済対策を提言。



セミナーの特別ゲストとして、安倍晋三前総理から激励のお言葉。

YouTube 対談の全編はこちらで公開

長島昭久は外交・安全保障に全力を傾けてきました!



尊敬する中曽根康弘元総理の前で憲法改正の演説

活米 という流儀 外交・安全保障のリアリズム 長島昭久

憲法考 集団自衛権 戦争防衛のため 長島昭久、防衛副大臣

(河野) 中国の影響力が拡大していく中で、日米とオーストラリア、カナダなど共通の価値観を持っている国が連携してどう向き合っていくか。とくに、ポスト・コロナは「自由社会」対「監視社会」、「民主主義」対「独裁」、あるいは、フェイクニュースも嘘もあるけれど自由にネットの中を駆け巡る社会と、政府が正しい情報を管理する社会、こう分かれていきそうです。
(長島) そういう中で、自由で開かれたインド太平洋の「自由」と「開かれた」を中心とする国際秩序をつくり上げることが大事ですね。そこで伺いたいののが、二つ。一つは香港問題。香港で起こっている当局による弾圧は自由で開かれた価値観とは相容れませんか。人権や法の支配を無視したようなやり方が通用するなどと中国に誤解させてはいけません。
(河野) 外相時代に中国側から、「二国二制度」なのですと。二国が先にあって「二制度」なのですよと言われた。ぼくは「二制度」「二国」でしようと言いつつ返したのですが、今や「二制度」は「二国」の灯火です。「二国二制度」という国際約束を反故にしたら相応のコストを支払わねばならないというところは、もつと強く主張すべきでしょう。
(長島) 最後に尖閣問題。2月1日にいわゆる、中国の海警法という、場合によっては軍艦や公船に対して武力の行使が認められるような、国際法違反ともいえるべき法律が施行されました。明らかにステータジが変わってきたと思います。「寸土を失うものは全土を失う」という格言がありますが、この中国の強硬姿勢にどう対応しますか。
(河野) 防衛大臣になった時に、アメリカの統合参謀本部議長が来て、『尖閣で戦うか』と問うから、『当たり前だろう。日本の領土だ』と返してやりました。やはり、日本の覚悟というのがアメリカにきちっと伝わって、日米でしっかり守るといのが大事だと思います。ただ、中国は恐らくそれはもう100年計画くらいのつもりでくるわけですから、こつちも長期の視点でむやみにエスカレートさせず、向こうが何かやってきた時には、毅然と日米で対応していく。
(長島) 「抑止」がすべてですね。相手にその気にさせない。過信させない。誤算させない。それだけに、やはり日本とアメリカの意志、特に日本の領土ですから、まず日本の意志があつて、アメリカがそれをサポートする、という強固な連携。それが具体的な行動を伴って相手に伝われば、そう簡単に手は出せません。失敗すれば、中国共産党支配の正統性が失われます。そういう状況を長期にわたってつくり続けられるかが課題ですね。



民主党政権下では、防衛副大臣・政務官として、国防政策をリード。



「プライムニュース」「報道1930」などテレビ出演多数。



国会質疑では揚げ足取りは一切せず、常に建設的な提案を心掛ける。



石破茂×長島昭久 半島有事の「死角」



河野 太郎 衆議院議員
規制改革担当大臣・新型コロナワクチン接種推進担当大臣、元外務大臣、前防衛大臣。米ジョージタウン大学卒。